

心中浪華の春雨

岡本綺堂

青空文庫

寛延二己巳年かんえん つちのとみどしの二月から三月にかけて、大坂は千日前せんきちまえ

に二つの首が獄門に梟かけられた。ひとつは九郎右衛門という凶太
 い男の首、他のひとつはお八重という美しい女の首で、先に処刑しおき
 を受けた男は赤格子あかごうしという異名いみようを取った海賊であつた。女は
 北の新地のかしくといつた全盛の遊女で、ある蔵屋敷くらの客に引か
 されて天満の老松辺に住んでいたが、酒乱の癖が身に禍わざいして、
 兄の吉兵衛に手傷を負わせた為ために、大坂じゆう引廻ひきまわしの上に獄
 門の処刑を受けたのであつた。

これが大坂じゅうの噂に立つて、豊竹座の人形芝居では直ぐに浄瑠璃に仕組もうとした。作者の並木宗輔なみきそうすけや浅田一鳥あさだいいちようがひたいをあつめてその趣向を練っていると、ここに又ひとつの新しい材料がふえた。大宝寺町の大工庄蔵の弟子で六三郎ろくさぶろうという今年十九の若者が、南の新屋敷しんやしき福島屋の遊女お園そのと、三月十九日の夜に西横堀で心中を遂げたのである。しかもその六三郎は千日寺に梟さくらされている首のひとつにゆかりのある者であった。

芝居の方ではよい材料が続々湧いて出るのを喜んだに相違ないが、その材料に掻き集められた人びとの中で、最も若い六三郎が最も哀れであった。

六三郎は九郎右衛門の子であつた。

九郎右衛門の素姓すじようはよく判つていない。なんでも長町ながまち辺で

小さい商いをしていたらしいが、太い胆きもをもつて生まれた彼は小

さい商人あきんどに不適當であつた。彼は細かい十露盤そろばんの珠たまをせせつて

いるのをもどかしく思つて、堂島どうじまの米あきないに濡れ手で粟の

大博奕おおぼくちを試みると、その目算はがらりと狂つて、小さい身代の

有りたけを投げ出してもまだ足りないような破滅に陥つた。もう

夜逃げよりほかはない。彼は女房と一人の伴とを置き去りにして、

どこへか姿を隠してしまつた。

ほかには頼む親類や友達もなかつたので、取り残された女房は

伴の六三郎を連れて裏家うらや住みの果敢はかない身となつた。九郎右衛門

のゆくえは遂に知れなかった。さなきだにふだんからかよわいからだの女房は苦勞の重荷にお押しつぶされて、その明くる年の春にきや氣病みのようなふうでもろ脆く死んでしまった。

六三郎はまだ十歳とおの子供でどうする方角も立たなかった。近所の人たちの情けで母の葬いだけはともかくも済ましたが、これから先どうしているのか、途方に暮れて唯おろおろと泣いているのを、大工の庄しようぞう蔵ふびんが不憫に思つて、大宝寺町の自分の家うちへ引き取つてくれた。孤みなしご児六三郎はこうして大工の丁稚でっぢになった。

父に捨てられ、母をうしなつた六三郎は、親方のほかには大坂じゆうにたよる人もなかつた。庄蔵はおとこ氣のある男で、よく六三郎の面倒を見てくれた。ちつとぐらい虐待されても他に行き

どころのない孤児が、こうしたいい親方を取り当てたのは、彼に取つてこの上もない仕合せであつたことはいうまでもない。六三郎もありがたいことに思つて親方大事に奉公していた。

六三郎はどの点に於いても父の血を引いていなかつた。彼は母によく似た優しい眉や眼をもつて生まれた。母によく似たすなおな弱々しい心をもつて生まれた。気のあらい大工の渡世とせいには少しおとなし過ぎると思われたが、その弱々しいのがいよいよ親方夫婦の不憫を増して、兄弟子あにでしにも朋輩ほうばいにも憎まれずに、肩揚げの取れるまで無事に勤めていた。腕はにぶくもなかつた。普通の丁稚とは違ふものの、十年の年季をとどこおりなく済ましたら、裏家住みにしろ世帯を持たしてやると親方も親切にいつてくれた。

六三郎は小作りの子供らしい男なので、十八の春に初めて前髪を剃った。

いくらおとなしい男でももう十八である。前髪を落したからは大人の仲間入りをしると、兄弟子や友達にすすめられて、六三郎はその年の夏に初めて新屋敷の福島屋へ足を踏み込んだ。相方あいかたの遊女はお園そのといつて、六三郎よりも三つの年かさであつた。十六の歳から色里いろざとの人となつて今が勤め盛りのお園の眼には、初うぶ心で素直で年下の六三郎が可愛く見えた。親方夫婦のほかには懐かしい人はないように思い込んでいた六三郎も、この夜からさらに懐かしい人を新たに発見した。正直な男も恋には大胆になつて、その後も親方や兄弟子たちの眼を忍んで新屋敷へ折りおりに姿を

見せた。

二人がどつちも若い同士であつたら、すぐに無我夢中にのぼり詰めて我れから破滅を急ぐのであろうが、幸いに女は男よりも年上であつた。色里の面白いことも苦しいことも知りつくしていた。まだ丁稚あがりの男の身分から考えても、五度逢うところは三度逢い、二度を一度にするのが二人の為であるということも知つていた。彼女はかれ小春こはる治兵衛じへえや梅川うめがわ忠兵衛ちゆうべえの悲しい末路をも知つていた。

「お前とわたしの名を浄瑠璃に唄われとうはない。わたしが二十五年ねんあの年明けまでは、おたがいに辛抱が大事でござんすぞ」

お園はいつも弟のような六三郎に意見していた。二人の間にも

う行く末の約束が固く取り結ばれていたのであつた。しかし艶^{はで}な浮名を好まない質^{たち}であるのと、もうひとつには自分よりも年下の、しかも大工の丁稚あがり^{おとこ}を情夫^{おとこ}にしているということが勤めする身の見得^{みえ}にもならないので、お園は自分がいよいよ自由の身になるまでは、なるべく六三郎との仲をひとには洩^はらしたくないと思つていた。そんな噂を立てられては男の為にもならないと案じた。若い男があせつて通つて来るのを、女はかえつて堰^せき止めるようにしていた。年下の男をもつた為に、お園はいろいろの気苦労が多かつた。遊びの諸払いも自分がいつも半分ずつ立て替えていた。こういうじみな、隠れた恋を楽しんでいただけに、二人の仲はなんの破綻^{はたん}を現^はれ^はず^はに^は続^はいて^はい^はつ^はた。親方も薄^うす^は悟^はつ^はて^はい

たものの、二人の恋がそれほどまでに根強くかたまつていようとはさすがに思いも付かなかつたので、若い者の廓くるわ通い、ちつと位は大目に見て置いてやれと、別に小言らしいことも言わなかつた。寛延二年には六三郎が十九になつた。お園は二十二の春を迎えた。

親方の家の裏には広い空地あきちがあつた。ここを仕事場としていたので、空地の隅には材木を積んで置く木納屋きなやがあつた。納屋の角には六三郎が来ない昔から一本の桜が植えてあつて、今はかなりの大木になつていた。六三郎はこの桜の下で鉋かんなや鋸のこをつかつて、春が来るごとに花の白い梢を仰ぐのであつた。今年もその梢がやがて白くならうとする二月のなかば、陰くもつて暖かい日の夕暮れで

あつた。六三郎は或る出入り場の仕事から帰つて来て、それから近所の風呂屋へ行つた。濡れた手拭をさげて風呂屋の門かどを出るころには、細かい雨がひたいにはらはらと落ちて来た。

「もし、もし」

うす暗い路ばたから声をかけられて、六三郎は立ち止まつた。呼びかけた人は旅ごしらえをして、深い笠に顔をつつんでいた。

「お前は大工の六三郎さんではござりませぬか」

「はい。わたしは六三郎でござります」

旅びとはあたりをちよつと見返つたが、やがてずっと寄つて六三郎の手をとつた。驚いて振り放そうとしたが、彼は掴つかんだその手をゆるめなかつた。

「六三ろくさ。よく達者でいてくれた。おれは親父おやじの九郎右衛門だ」
足掛け十年振りで父に突然めぐり合った六三郎は、嬉しさと懐かしさに暫くは口も利けなかつた。彼は父の手にすがつてただ泣いていた。

父はどこで聞いたか、我が子が大宝寺町の庄蔵親方の世話になつてゐることをもう知つていた。そうして、おれは当時西さい国こくの博多に店を持つて、唐とうじん人あきないを手広くしている。一年には何千両という儲もうけがある。それでお前を迎いに來た。大工の丁稚奉公などしていても多寡が知れている。おれと一緒に西国へ來て大商人おおあきんどの跡取りになれと囁ささやいて聞かせた。

六三郎は夢のようであつた。行くえの知れなかつた父が突然に

帰つて来て、大商人の跡取りにするから一緒に来いという。なんだか嘘らしいような話でもあつたが、正直な六三郎は父を疑わなかつた。しかし親方に無断でこれから直ぐに行くのは困ると言つた。親方に逢つてこれまでの礼を述べて、穏やかに暇を貰つてくれと父に頼んだ。

九郎右衛門はなぜか渋つていたが、結局わが子の言い条を通して、親方のところへ暇を貰う掛合いに行くことになつた。いよいよ博多へ行くと決まつたら、お園のことも父に打ち明けようと思つていたが、六三郎はまだそれを言い出す暇がなかつた。雨はしとしと降つて来たので、父子は濡れながらに路を急いだ。父子のおやこうしろに黒い影が付きまどつて、二人ともに知らな

つた。

黒い影は町まち方かたの捕手とりてであつた。父子が大寶寺町まで行き着かないうちに、捕手は二人を取り卷いた。九郎右衛門は素早くぐりぬけて逃げ去つたが、あつけに取られてうろろうろしていた六三郎はすぐに両腕を掴まれた。

四つの木戸は閉められた。非常を報しらせる太鼓はとうとうと鳴つた。出口、出口を塞がれて九郎右衛門は逃げ場に迷つた。ひとつ所をいきつ戻りつして暫くは捕手の眼を逃れていたが、その夜の戌いぬの刻こく（午後八時）頃ころにとうとう繩にかかつた。

唐人あきないというけれども、彼は長崎辺の商人のように陸上で公然と取引きをするのではなかつた。彼は拔荷ぬけ買いというもの

で、夜陰やいんに船を沖へ乗り出して外国船と密貿易をするのであった。密貿易は厳禁で、この時代には海賊と呼ばれていた。彼は故郷の大坂を立ち退のいて、中国西国をさまよううちに、大胆な彼は自分に適当な新しい職業を見い出して、かの抜荷買いの群れにはいつた。それが運よく成功して、表向きは博多の町に唐物とうぶつあきないの店を開いているが、その実は長崎奉行の眼をくぐつて、いわゆる海賊を本業としていたのである。

こうして十年を送るうちに、彼もさすがに故郷が恋しくなつた。彼ももう四十を越して、鏡にむかつて小鬢こびんの白い糸を見いだした時に、故郷に捨てて来た女房や倅がそぞろに懐かしくなつた。余り懐かしさに堪えかねて、彼はそつと大坂へのぼつて来た。その

留守の間に、ふとした事から秘密が破れて、彼の仲間の一人が召捕られた。長崎の奉行所からは早飛脚はやびきやくに絵姿を持たして、彼の召捕り方を大坂の奉行所へ依頼して来た。

そんなことを夢にも知らない彼は、自分から網の中にはいつて来た。自分が昔住んでいた長町辺を尋ね歩いて、それとなく女房や子供の身の上を聞き合わせると、女房はとうに死んでいた。倅は大工の丁稚でっぢになって大宝寺町にいることが知れた。彼も今更のように昔を悔くやんだがもう取り返しの付くことではない、せめては倅だけを連れ帰って父子いっしょに暮らそうと、大宝寺町の近所をさまよっているうちに、彼は遂に待ち網にかかってしまった。

「十年振りで我が子の顔を見ましたれば、思い置くこともござり

ませぬ。しかし又なまじいにめぐりあつた為に、なんにも知らぬ我が子に連まきぞえ坐の咎めが掛かろうかと思うと、それが悲しゆうござります」と、九郎右衛門は白洲しろすで涙を流した。

奉行にも涙があつた。六三郎はふだんから正直の聞えのある者、殊に父子とはいいいながら十年も音信不通で、父の罪つみとが咎に就いてなんの係り合いもないことは判り切つている。また一方には親方の庄蔵から町まちなぬし名主にその事情を訴えて、六三郎の赦免をしきりに嘆願したので、結局六三郎はお構いなしということゆるで免された。「飛んだ災難であつたが、まあ仕方がない。悪い親を持ったが因果と諦めろ」と、親方は慰めるように言った。

この噂を聞いて、お園も定めて案じているだろうとは思つたが、

この場合どうしても謹慎していなければならぬ六三郎は、親方の手前、世間の手前、迂闊うかつに外出することもできないので、じつと堪こたえておとなしく日を送っていた。

九郎右衛門は胆きもの据わった男だけに、今更なんの未練もなしに自分の罪科ざいかをいさぎよく白状したので、吟味にちつとも手数が掛からなかった。彼は大坂じゆうを引廻しの上で、千日寺の前に首さくらを梟さくらされた。

なまじいに親にめぐり合つたのが六三郎の不幸であつた。大方はこうなることと覚悟はしていたものの、父の罪がいよいよ獄門と決まつたのを知つた時は、彼は怖ろしいのと悲しいのとで、実に生きてゐる空はなかつた。今日が死罪という日には、彼は飯も

くわずに泣いていた。親方もただ「諦めろ、あきらめろ」というよりほかに慰めることばもなかつた。

兄弟子たちも六三郎には同情していた。近所の人たちも彼を気の毒に思っていた。しかし世間はむごいもので、気の毒とか可哀そうとかいう口の下から、大工の六三郎は引廻しの子だとか、海賊の子だとかいって、暗あんに彼を卑しむような蔭口をきく者も多かつた。実際、海賊の子ということが彼の名誉ではなかつた。気の弱い六三郎は父の悲惨な死を悲しむと同時に、自分の身にお圧しかかつて来る世間のむごい迫害を恐れた。自分ばかりではない、大恩のある親方の顔にまでも泥を塗つたのを、彼はひどく申し訳のないことに思つて嘆いた。

「そんなことをいつまでもくよくよするな、人の噂も七十五日で、そのうちには自然と消えてしまふに決まっている。ちつとの間の辛抱じゃ。ひとが何を言おうとも気にかけるな」

親方はこう言つて、いつも六三郎を励ましていた。六三郎は涙を流してありがたく聴きいていた。その弱々しい泣き顔を見ると、親方もいじらしくつてならなかつた。いくら屈託しても今更仕方がない、ちつと酒でも飲んで見ろなどともいった。

父の首が梟さくらされてから十三日目の晩に、六三郎は手拭に顔を包んでそつと福島屋へ訪ねて行つた。今の身の上で晴れがましい遊興はできない。彼はお園を格子口まで呼び出して、そのやつれた蒼白い顔を見せた。このあいだから男の身を案じ暮らしていたお

園は、薄暗い軒行燈のきあんどうの下にしよんぼりと立っている六三郎の寂しい影を見た時に、涙がまず突つ掛けるようにこぼれて来た。

「大坂じゆうに隠れの無い噂、わたしは残らず聞きました。それでもお前の身に何の祟りたたもなかったのが、せめてもの仕合せというもの。そうして、親方の首尾はどうでござんすえ」

「いつもいう通り、親方は親切な人。いよいよ私わしをいとしがつてくれる。それにちつとも苦労はない」

そう言いながらも、しおれ切っている男の顔が、半月前とは別の人のように痩せ衰えているのを見るにつけても、その悼いたましい苦労が思いやられて、お園の涙は止めどなしに流れた。

親方は親切な人で、自分にもいろいろと力をつけてくれる。親のことはもう諦めるよりほかはない。

こう思えば差し当って六三郎の身の上は何のわずらいもないのであるが、彼の最も恐れているのは広い世間の口と眼とであつた。むごい口で海賊の子と罵られ、冷たい眼で引廻しの子と睨まれる。それでは世間に顔出しができない。出入り場へも仕事に行かれない。

「それを思うと、俺はもう生きている気はない」と、六三郎は意気地がないように泣き出した。

男の氣の弱いのはお園もかねて知っているので、こうして意氣地なく泣いているのが、彼女にはいよいよいらしく憐れに思われた。お園は子供をすかすように男をなだめて、たとい世間で何と言おうとも、誰がうしろ指を差そうとも、お前には頼もしい親方もついている、わたしというものもある。決して心細く思うには及ばない。ことし十九の男が泣いてばかりいるものではない。もつと心を強くもつて男らしくしなければならぬと、嚙んでふくめるように言つて聞かせた。六三郎はすなおに、ただあいあいと聴いていた。

二人はそれなりで別れた、呼び上げたいのは山々であつたが、お園は家の首尾を気づかつて、当分はおとなしく辛抱している方

がいいと、くれぐれも言い含めて帰した。

それからまた半月も経った。親方の家の桜は春を忘れずに白く咲き出した。六三郎もこのごろは空地の仕事場へ出て、この桜の下で板割れなどを削っていた。親方も当分は六三郎を外の仕事へは出すまいと思っていた。しかし日が経つにしたがって、悪い噂はかえつて拡がるらしく、直接に自分の耳にはいることや、ほかの弟子たちが世間から聞いて来るいろいろの噂や、どれもこれもみんな六三郎には不利益なことばかりであった。ある出入り場では今後六三郎を仕事によこしてくれるなど言った。ある職人は六三郎とは一緒に仕事をしないと云った。海賊の子に対する世間の憎悪と迫害とが案外に力強いのに親方も驚かされた。

「可哀そうに、六三郎に罪はない」

親方がいかに六三郎を庇かばつても、彼の手ひとつで世間という大きい敵を支えることはできなかつた。親方もしまいには考えた。こんなことでは六三郎はいつまでも日蔭者で、晴れて世間を渡ることでもできまい。いつそ世間から忘れられるように当分は他国へやつた方がいいかとも思つた。

「お前も科とがにん人の子と指さされてはこの大坂にも住みづらかろう。おれが添え手紙をして江戸の親方衆に頼んでやるから、ほとぼりの冷さめるまで二年か三年か、江戸へ行つて修業して来い」

と、親方は言つた。

六三郎は素直に承知した。兄弟子たちもそれがよかろうと勧め

た。

今の六三郎としては、当分この土地を立ち退くというのが最も利口な方法であつたに相違ない。六三郎もそう思った。しかしそれを断行するには、彼に取つて辛い悲しいことが二つあつた。第一はお園に別れることで、その理由はいうまでもない。第二はこの土地を去ることである。大坂に生まれて大坂以外に一度も足を踏み出したことのない六三郎は、自分を呪う大坂の土がやつぱり懐かしかつた。見も知らない他国へひとり身で飛び込んで行くのが何だか恐ろしかつた。海賊の子と指さされて大坂に住むのも辛いが、他国者と侮られて江戸に住むのも苦しからうと、それが彼の小さい胆きもをおびえさせた。

六三郎は三月十五日の晩に福島屋へ行つた。彼はお園に逢つて、江戸へ行かなければならなくなつた訳を沈んだ声で物語つた。お園も一度は驚いたが、親方の意見も無理はないと思つた。なるほど当分は氣を抜くためにこの土地を立ち退くのが六三郎の身の為でもあろうと考へた。

他国の奉公は辛くもあろうが、そこが辛抱である。石に喰い付いても我慢しなければ男一匹とはいわれまい。お前が歸つて来る頃には、わたしの年季も丁度明ける。そうしたら、どんな狭い裏うら家住みらやでも二人が世帯を持って、かねての約束通りに末長く一緒に添い遂げられる。それを楽しみに二人は当分分かれ分かれになつて、西と東で暮らすことにしよう。二年三年はおろか、たとい

五年が十年でもわたしはきつと待っている。わたしの心に変りはない。お前も江戸の若い女子おなごに馴染なじなどを拵こぎえて、わたしという者のあることを忘れてくれるな。親方の所へたよりをする伝手つてがあつたら、わたしの方へもたよりを聞かしてくれ。いよいよ発つという時には、もう一度逢いに来てくれと、お園は細こま々こまと言ひ聞かせて、その晩も格子の先で男と別れた。

六三郎ももう決心した。一旦は懐かしい大坂の土にも離れ、恋しいお園にも別れて、西も東も知らない他国へ行つて、当分は苦しい辛抱をするよりほかはないと心細くも覚悟した。

「では、親方さん。いよいよ江戸へ行くことにいたします」

「それがいい。なに、多寡が二年か三年の辛抱じゃ。いい時分に

は俺の方から呼び戻してやる。せいぜい腕を磨いて、大坂者を驚かすような立派な職人になって帰って来い。人間は腕次第じゃ。お前がいい腕をもっていれば、今までお前を悪う言つた者も、向うから頭をさげて頼んで来るようにもなる」

親方は江戸の或る棟梁に宛てた手紙を書いてくれて、これを持って行けばきつと面倒を見てくれると言つた。初旅であるから気をつけると、道中の心得などもいろいろ言い聞かしてくれた。旅の支度もしてくれた、路用もくれた。兄弟子たちも思い思いに饞せんべつ別べつをくれた。みんなの親切が身にしみて嬉しいに付けても、六三郎はこの親切な人びとに別れて、他国の他人の中へ踏み出すのがいよいよ辛かつた。彼は人の見ない所で時どき涙をふいた。

二十日は日がいいというので、いよいよその朝に草鞋わらじを穿くことになった。その前の日に六三郎は母の寺詣りに行きたいと言つた。

「よく気がついた。当分お詣りもできまいから、おふくろの墓へ行つて、よくその訳をいつて拝んで来るがいい」と、親方は幾らかの布施ふせを包んでくれた。

六三郎はありがたくその布施をいただいて、午ひるすぎから親方の家を出た。今日もどんよりと陰つた日で、裏の空地の桜は風もないのにもう散りそめていた。

寺は六三郎が昔住んだ長町裏ながまちにあつた。親方の家へ引き取られてからも六三郎は参詣を欠かしたことがないので、住職にも奇き

特にどく思われていた。住職も今度の一条を知っているので、六三郎の不運を気の毒がつて親切に慰めてくれた。江戸へ行くというのを聞いて、成る程それもよからう、たとい幾年留守にしても阿母おつかさんの墓を無縁にするようなことは決してしない、安心して行くがよいと、これも江戸の知りびとに添え手紙などを書いてくれた。

暇いとま乞いをして寺を出るころには雨が降つて来た。六三郎は雨の中を千日寺へも行った。父の死しにくび首はもう梟さらされていなくても、せめて墓詣りだけでもして行きたいと思つたのである。死罪になつた者の死体は投げ込み同様で、もとより墓標なども見えなかつたが、それでも寺僧の情けで新しい卒塔婆そとばが一本立っていた。

十年振りめぐり合つた父が直ぐにここの土にならうとは、ま

るで一いつとき 晌の夢としか思われなかった。しかもその夢はおそろしい夢であった。卵塔場らんとうばには春の草が青かった。細かい雨が音もなしに卒塔婆をぬらしていた。父に逢った夕暮れにもこんな雨にぬれたことを思い出して、顔のしずくを払う六三郎の指先には涙のしずくも流れた。

死んだ父母に暇乞いは済んだ。今度は生きた人に暇乞いをしなければならぬ。日が暮れて六三郎はさらに新屋敷へ行った。

「よう来て下さりました」

お園は六三郎を揚屋あげやへ連れて行った。今夜は当分の別れである。格子の立ち話では済まされなかつた。二人が薄暗い燭台の前に坐つた時に、雨の音はまだやまなかつた。お園はどう工面くめんしたか二

両の金を餞別にくれた。それから自分が縫ったといつて肌着をくれた。

もう決心はしたものの、六三郎はやっぱりお園に別れるのが辛かった。呪われた土地がやっぱり懐かしかった。お園と行く末の話をしている間も、何に付けても涙ぐまれた。

「このあいだも言つた通り、お前も男、必ず弱々しい気をもつて下さるな。女でも生まれ故郷を離れて、遠い長崎や奥州の果てへ行く者も沢山たくさんある。この廓くわにいる人でも大坂生まれは数えるほどで、近くても京丹波きよたんば、遠くは四国西国から売られて来て、知らぬ他国で辛い勤め奉公しているのもある。それを思えば男の身で、多寡たかが二年か三年の辛抱がならぬということがあるものか」

お園は同じことを繰り返して力を付けた。

「それはわしも知っている。親方にもいわれ、兄弟子たちにもいわれ、お前にも意見され、どうしても江戸へ行くことに覚悟は決めている。どんな辛い辛抱もして、立派な職人になって戻って来るほかに、どうぞそれまで待っていてくれ」

口だけは男らしく言っても、それを裏切る涙は六三郎の眼に浮いていた。

齒がゆいように弱々しい男がお園にはやっぱり可愛かった。可愛いというよりも、いじらしく憐れでならなかった。うるさい世間の口を避けるために、江戸へ修業に行くのも確かにいい。そうして、他人の中で揉もまれて来れば、人間も少しは強くなるに相違

ない、腕もあがるに相違ない。一時いつときは辛くとも当人の末の為になる。そう思つて自分もしきりに勧めていゝのではあるが、また考へて見ると、人にもよれ六三郎はこうした稼業かぎように不似合いな、ふだんから身体もかよわい方である。氣の弱いのも幾らかその弱いからだに伴つてゐる。それが西も東も知らない他国に出て、右も左も他人の中へ投げ込まれたらどうであろう。

「鳥でさえも旅たびがらす鴉カラスはいじめられる」

お園はそんなことも悲しく思いやられた。自分も初めてこの廓さとへ身を沈めた当座は、意地の悪い朋輩にいじめられて、蔭で泣いたこともたびたびあつた。いつそ死んでしまいたいように思つたこともあつた。からだの弱い、氣の弱い六三郎は、きつと自分と

同じような悲しい口惜しい経験を繰り返すに相違ない。江戸の職人は気があらいと聞いている。その中に立ちまじつて毎日叱られたり小突かれたり、散々さんざんひどい目に会わされた上に、万一病みわずら煩いになった暁にも、まわりが他人ばかりでは碌に看病してくれる者もあるまい。

こう思うと、自分の前にしよんぼりと坐っている男の痩せた顔や、そそけた髪や、それもこれもお園の胸を陰らせる種であった。男の末のためを思えばこそ、涙を呑み込んで無理に出してやろうとはするものの、自分とても別れたくないのは山々である。口でこそ二年三年というものの、その間には自分の身にもどんなことが起らないとも限らない。今夜が顔の見納めで、もう二度と逢わ

れないようになるかも知れない。そんなことを考えると、お園も男に釣り込まれたように心が少し弱つて来た。

そうかといつて今更どうなるものではない。こうなつたら、どうしても男を励まして、無理にも江戸へやるより他ほかはない。弱いながらも男はもうその覚悟をしている。ここで自分がもろい涙を見せて、男の覚悟をにぶらせるような事があつてはならない。所し詮よせんこつという苦しい破目はめに落ちたのが男も自分も不運である。この不運を切り抜けるには強い覚悟がなければならぬ。やれるところまで存分にやつて見て、それで切せつない思いが透らなければ、よくよく二人に縁がないものと諦めるよりほかはないと、世間の苦勞をよけい積んでいるお園は、懐ふところ子ごのような六三郎よりもさ

すがに強い覚悟をもって、無理に笑い顔をつくっていた。そうして江戸の客から聴いたことのある浅草の観音さまや、上野の桜や、不しのぼず忍の弁天さまや、そんな江戸名所のうわさなどを面白そうに男に話して聞かせた。

六三郎はやつぱり浮かない顔をして聴いていた。どんな名所も故郷ほどには面白そうに思えなかった。たとい毎日逢われないでも、お園の生きている土地に同じく生きていたかった。

「あしたはいつごろ発たつのでござんす」と、お園は雨の音を気づかいながら訊きいた。

「朝の六つ半に八軒屋はちけんやから淀の川舟に乗って行く。あしたは旅立ちよしという日と聞いているから、大抵の雨ならば思い切って

発つつもりで、親方も兄弟子たちも八軒屋まで送つてやると言うていた」

「ほんに長い旅でござんすから、暦こよみのよい日をえらむのが肝腎かんじん。わたしもその刻限こくげんには北を向いて、蔭ながら見送ります。この頃の天気癖で、あしたもどうやら晴れそうもないが、さして強いこともござんすまい」

「どうで長い道中じゃ。雨を恐れてもいられまい」と、六三郎は寂しく笑った。

「お前は下戸げこじゃが、今夜はお別れに一杯飲みなさんせ。酔うて面白う遊びましょう」

二人は愁うれいを打ち消そうとして杯を重ねた。三月も半ばを過ぎ

て、浪華の花を散らす春雨は夜の更けるまでしめやかに聞えた。

「家でも案じていると悪い。殊にあしたは早発ちじや。名残は惜しいが、もうそろそろと帰りなさんせ」と、しばらくしてお園は男の顔を見ながら優しく言った。

「ほんにそうじや。六三めは昼から家を出て、今頃までどこに何をしていることかと、親方も定めて案じているであらう。折角の発ちぎわに叱られてはならぬ」

「ほほ、親方も粹すいじや。大抵はこうと察さしていさんしよう」と、お園は笑った。

六三郎も黙って笑った。お園はその耳に口を寄せて言った。

「お前、江戸の女子おなごと心安うしなさんすな、よいかえ」

「なんの、阿房あほうらしい」

ようよう起ち上がった六三郎のうしろ姿を見ると、お園は急に胸がいつぱいになった。ふた足三足送ってゆくうちに、胸はいよいよ詰まってきた、不思議な暗い影がお園の周りにまわまつわって来るように思われた。お園は男といっしよに闇の中を迷っているようにも感じられて、一種の恐怖に足がすくんだ。力のない男の歩みも遅かった。

どう考えてもこの弱々しい男を、見も知らぬ遠い他国へ追いやつて、たと苦勞させるのがいじらしかつた。苦勞をする男も辛つらいには相違ないが、これから先、朝に夕にその苦勞を思いやる自分の辛さもしみじみ思いやられた。そんな苦しい思いをした上で、

確かに末の楽しみがあるやらないやら、それもお園は俄かに不安になつて来た。眼の前はいよいよ暗くなつて来た。

「六三さん。お前、どうしても江戸へ行く気かえ」と、お園は男の肩に手をかけて今更のように念を押した。

男は不思議そうな顔をして立ちどまった。蒼白い顔と顔とが向き合つた。お園は暗い影につつまれてしまったように感じた。

夜の春雨はやはりしとしとと降つていた。

雨は明くる朝まで降りやまないで、西横堀の川端に死しかばね屍をさ
らした男と女との生なまなましい血を洗い流した。男は鑿のみで咽喉のどを突
き破つていた。女は剃かみそり刀で同じく咽喉を掻き切つていた。検視

の末に、それが大工の六三郎と遊女のお園とであることは直ぐに判つたが、二人がいつ新屋敷をぬけ出したのか誰も知らなかつた。なぜこの西横堀を死場所にえらんだのか、それも誰にも判断がつかなかつた。

六三郎は懷ろに書置きを持つていた。それは親方に宛てたもので、単に御恩を仇あだに心得違ちがいをして相済まないとしいう意味が認めたまてあつた。お園は自分と仲のいい朋輩に宛てて一通の書置きを残してあつた。それには六三さんを江戸へやるのがいかにも可哀そうだから一緒に死ぬということが書いてあつた。お園が六三郎とそれほどの深い仲であつたというのが今になつて初めて判つた。仲のいい朋輩すらもこの書置きを受け取るまでは、勤め盛り売れ

盛りのお園が大工の丁稚と命賭けの恋に落ちていようとは思ひもつかなかつた。

「よくよく運が悪う生まれたのじゃ」と、親方は泣いて六三郎の死骸を引き取ろうとしたが、時の法律によつて直ぐに引き取ることを許されなかつた。心中したお園と六三郎との死骸は、千日寺のうしろにある俗に灰山という所に三日のあいださらされた。罪ある父の首を梟さくらされた場所を去らずに、その子は恋の亡骸むくろを晒さらしたのであつた。

三日の後に六三郎の死骸は親方に引き渡された。お園は身寄りもないので主人に引き渡された。

お園と六三郎とが心中した日に、神崎では御駕籠の十右衛門と

いう者が大勢の馬士まごを斬った。新しい材料はそれからそれへと殖えて来るので、浄瑠璃の作者もその取捨しゆしやに苦しんだが、豊竹座ではお園六三郎と、かしくと、十右衛門と、その三つの事件を一つに組み合わせ、八重霞浪華やえがすみなにわのはまおぎ浜荻という新浄瑠璃をその月の二十六日から興行することになった。

お園と六三郎との名はどうとう浄瑠璃に唄われてしまった。しかし近松の時代と違って、事実を有りのままに仕組むということは遠慮しなければならぬような習わしになっていたので、大工の六三郎は武士に作り替えられて、大和の浪人小柴六三郎という名を番附にしるされた。

青空文庫情報

底本：「江戸情話集」 光文社時代小説文庫、光文社

1993（平成5）年12月20日初版1刷発行

入力…tatsuki

校正…かとうかおり

2000年6月10日公開

2008年10月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

心中浪華の春雨

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>